



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	3. 日本語・日本文化研修プログラム 第3期(年報編,2003年度後学期・2004年度前学期)
Author(s)	牟田, おりゑ
Citation	[岐阜大学留学生センター紀要 = Bulletin of the International Student Center Gifu University] vol.[2004] p.[36]-[40]
Issue Date	2005-03
Rights	
Version	岐阜大学留学生センター (The International Student Center Gifu University)
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3422

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

3. 日本語・日本文化研修プログラム 第3期

留学生センター教授 牟田 おりえ

1. 第3期概要

第3期参加者は大使館推薦の国費留学生1名（シンガポール大学）、大学推薦の国費留学生5名（スウェーデン・ルンド大学、タイ・チュラロンコン大学、カセサート大学、中国・広西大学、吉林大学）であった。第2期から留学生センター内で実施された日本語レベル別クラス編成は、さらに充実した編成体制のもとに第3期参加者にも適用され、毎日1限目を「総合日本語」と名付けて、レベル別編成で行った。プレイズメント・テストの結果にしたがって、3名（漢字圏）は最高レベルのD（中上級）クラスに、あとの3名（非漢字圏）はその次のレベルC（中級）クラスに入ることになった。春期にはDクラスを卒業した3人は全学共通科目、センターの「日本文化」科目および技能別日本語科目を履修し、Cクラス卒業生はDクラス総合日本語、技能別日本語科目、文化科目を履修した。

日研生が履修した総合日本語クラスに関して、学内公募による研究生、大学院生もこれらのクラスを履修する仕組みになったため、クラス・サイズが大きくなって活気が出るというメリットもあったが、種類の違う学生たちの混成クラスという理由からの弊害も起こった。特に第3期の日研生は6人全員が真面目を体現したようなタイプの学生で、毎週の各種宿題、授業の予習やテストの準備など、申し分のない勉学態度である一方、クラスの半数を占める学内公募の研究生、大学院生は所属学部のセミナー、授業などと重なるためか、予習やテスト準備の不足などが目立った。日研生にとってはこのプログラム自体が留学目的であるのに対して、学内公募の学生にとって日本語学習は必修ではなく、任意であることがその大きな理由と考えられる。

2. 第3期履修生／修了生（アルファベット順）

ラップクワン・ポームトーン（Rubkwan Pomthong：タイ、カセサート大学）

ジェニー・ルース（Jenny Roos：スウェーデン、ルンド大学）

謝 相如（Seah Siang Joo：シンガポール大学）

ベンチャラク・ストヨードロス（Benjalak Sudyodros：タイ、チュラロンコン大学）

呉 彬華（Wu Bin Hua：中国、広西大学）

于 曉雨（Yu Xiaoyu：中国、吉林大学）

3. 論文指導・テーマ（論文発表会：2004年9月15日10:00-12:00）

毎年、論文テーマは学生が選択するが、論文になりうるかどうかの相談は、全学生と全指導教官との会合で、お互いに話し合いながら決定する。そして、テーマによって指導教官を決め、その後の進捗・方向性などは担当指導教官と学生に任される。第1、2、3期とも、学生の関心の在り処が明確に出たテーマ選びであった。特に第3期学生の選んだテーマのうち、小論文には大きすぎるテーマも多く、焦点を絞り、客観性を目指すために、指導は困難を極めるものもあった。

しかし、全員、真面目に取り組み、締切りまでにまとめあげ、論文のセミナー発表も全員がパワーポイントを使用しながら、問題点をうまくまとめ、質疑応答も堂々と対応していたのが印象的であっ

た。セミナー発表は一切指導しなかったが、全員がきちんと準備し、教官からの厳しい質問も受け答える姿に、1年間の成長を見る思いがした。

小論文の指導にあたる教官にとって、日本に来て半年目の学生に日本語で小論文を書かせる指導はかなりきついものがある。その苦勞が報われるのはその論文レベルが認められることだろう。そのよい例が、第2期生のジェシカ・マカイ（グリフィス大学）の小論文が帰国後オーストラリアで催された全オーストラリアの大学法学部生・大学院生対象「日本関係小論文・コンテスト」で Special Mention（特別表彰）されたことである。ジェシカからそのニュースがもたらされた時は、苦勞が報われたという思いがした。岐阜大学の「日本語・日本文化研修プログラム」は厳しすぎるという批判も3期の学生（本学留学生センター『ニュースレター No.3』）から出されているが、帰国後によかったと思う時が来ることを信じて続けている。

以下が第3期日研生の小論文テーマと担当指導教官である。

ラップクワン・ポームトーン：「飲酒の文化 -- 日本とタイの比較」、指導教官・太田孝子

ジェニー・ルース：「スウェーデンにおけるジャポニズムの中の芸者像に関する調査」、指導教官・牟田おりえ

謝 相如：「若者の価値観の変動」、指導教官・太田孝子

ベンチャラク・ストヨードロス、「日本とタイにおける同性愛と現在のカミングアウト」、指導教官・牟田おりえ

呉 彬華：「中国と日本の食文化 -- 料理の特徴と構成、食の思想、および食材と調理法の比較的观点から --」、指導教官・森田晃一

于 曉：「『東京ラブストーリー』の女性たちと中国女性」、指導教官・森田晃一

4. a: プログラム構成（秋期：2003/10-2004/2）

毎朝1限目の「総合日本語」は日本語能力別にC, Dクラスと別れるが、それ以外の技能別日本語クラスおよび文化科目は合同である。各科目/クラス名の後の名前は担当教員を示す。

	月	火	水	木	金
8:50 10:20	総合日本語 Cクラス(河地) Dクラス(富田)	総合日本語 Cクラス(河合) Dクラス(城戸)	総合日本語 Cクラス(牟田) Dクラス(三輪)	総合日本語 Cクラス(河地) Dクラス(牟田)	総合日本語 Cクラス(藤江) Dクラス(橋本)
10:30 12:00	文学を通して見た日本(選択:全学共通)	映像を通して見た日本(選択:全学共通)		口頭表現(橋本)	文章表現(今井田)
12:50 2:20	民衆の文化(太田)	漢字(森田):非漢字圏の学生のみ	読解演習(加藤)	岐阜の文化(森田)	
2:30 4:00	異文化コミュニケーション(牟田)	日本史(選択:全学共通)			

日本語科目 (必須)

総合日本語：1単位 x5 = 5単位

文章表現：1単位

口答表現：1単位

読解演習：1単位

漢字：1単位 (漢字圏の学生は選択科目から選んで、代わりに履修すること)

文化科目 (必修)

民衆の文化：2単位

岐阜の文化：2単位

異文化コミュニケーション：1単位

選択科目 (最低1科目を選択必修科目として履修)

全学共通／文学を通して見た日本：2単位 (教室：全学共通棟 4D)

全学共通／映像を通して見た日本：2単位 (教室：全学共通棟 4D)

全学共通／日本史：2単位 (教室：全学共通棟 1A)

注：3人の漢字圏の学生は「漢字」クラスの代わりとして、全学共通科目を選択させた。

「異文化コミュニケーション」は教育学部から委嘱された「国際理解教育講義・実習」に日研生その他の留学生を加えて実施したものである。教育学部日本人学生の履修修了者数は13名であった。

4. b: プログラム構成 (春期：2004/12-9/16)

(中上級用クラス)

	月	火	水	木	金
8:50 10:20	総合日本語 Dクラス (三輪)	総合日本語 Dクラス (牟田)	総合日本語 Dクラス (城戸)	総合日本語 Dクラス (河地)	総合日本語 Dクラス (橋本)
10:30 12:00	*全学共通／文学 を通して見た日本 (牟田)	漢字 (森田)	読解演習 (加藤)		口頭表現 (橋本)
12:50 2:20		5. 全学共通／論 文の書き方 (牟田)		日本文化 (森田)	
2:30 4:00					

日本語科目

総合日本語：1単位 x5 = 5単位

口答表現：1単位

読解演習：1単位

漢字：1単位

論文の書き方：2単位 (全学共通日本語科目)

日本文化科目

日本文化：2 単位

文学からみた日本：2 単位（全学共通日本事情科目）

小論文

論文指導：1 単位

小論文：4 単位（7000 ～ 8000 字）

上級用クラス

	月	火	水	木	金
8:50 10:20					
10:30 12:00	* 全学共通 / 文学からみた日本 (牟田)		読解演習 (加藤)		口頭表現 (橋本)
12:50 2:20		* 全学共通 / 論文の書き方 (牟田)		日本文化 (森田)	

日本語科目

口頭表現：1 単位

読解演習：1 単位

論文の書き方：2 単位（全学共通日本語科目）

日本文化科目

日本文化：2 単位

文学からみた日本：2 単位（全学共通日本事情科目）

選択必修科目

全学共通科目から選択：6 単位

謝 相如 (Seah Siang Joo)：日本語 CI、日本語 DIII、教養セミナー「岐阜で暮らすということ」、「岐阜県方言のしくみを学ぶ」(計 8 単位)

呉 彬華 (Wu Bin Hua)：日本語 CI、日本語 DIII、日本事情 AI、教養セミナー「岐阜で暮らすということ」、「岐阜県方言のしくみを学ぶ」(計 10 単位)

于 曉雨 (Yu Xiaoyu)：日本語 CI、日本語 DIII、教養セミナー「岐阜で暮らすということ」、「岐阜県方言のしくみを学ぶ」(計 8 単位)

小論文

論文指導：1 単位

小論文：4 単位（7000 ～ 8000 字）

見学（秋・春期）：岐阜県歴史博物館、歌舞伎・能楽鑑賞、明治村、郡上八幡、大相撲

異文化コミュニケーション（国際理解教育講義・実習）

このコースは教育学部の「国際理解教育講義・実習」と併用して日本人・留学生双方向のコミュニケーション・クラスを目指している。今回は日本人・留学生の数がバランスがよく、日本人2人対留学生1人のグループに分けられ、毎週トピックに従って、お互いの国の事情、自分の環境その他の問題を話し合っていた。途中で、時事問題として取り上げられた日中関係にかかわる問題をいくつか取り上げ、誤解の原因や予防などを含めて話し合った。前半の話し合いの中から生まれた様々なトピックのうち、追及したいトピックをグループ毎に選び、背景調査・結果報告を通して浮かび上がってくる文化的理解度の違いなどを確認した。学生達が選択したトピックは、韓国の教科書における日韓関係記述；日本の教科書と歴史教育問題；結婚式の比較文化等であった。履修学生は日研生6人、日韓理工系学部留学生1人、日本人学生13人、その他留学生数人だった。

教育学部ではこのコースを2005年度から廃止するとのことで、コースの最後に学生に聞いたところ、このようなクラスは必要だという答であった。その大きな理由は、岐阜大学の学生にとってこのクラスで留学生と話したことが生まれて初めて日本人以外の人と話す経験だというのである。そんな学生がまだ多いということに驚きを禁じ得ないが、まずは媒介語の日本語で様々なことを話し合いながら、文化摩擦や人種・政治問題までもお互いの思いを話し／聞き、目が開かれていくという機会は重要だと思う。